

長崎県地学会創立10周年記念大会討論会

70年代の長崎県地学会はどうあるべきか

とき : 昭和46年11月6日
ところ : 県立諫早高校物理教室
司会 : 荒木真寿男・田島俊彦

荒木(磨屋小) : 会も10年たったので、これからどうしてゆくべきかをきぐって行きたいと思えます。発言はご自由に。

田島(梅崎中) : 48年度から高校の地学が何校かに限られてくるが、

小田(長崎西高) : 48年度からの理科の科目の中で、第1年目は各学校でまかされている。地学は選択3単位になる。物化生地がそれぞれⅠとⅡとなり、基礎理科が加わり、9科目となる。われわれに一番好ましい方法は、1年で地学3、生物3、2年で物理3、化学3で、Ⅱを3年で選択する。問題は1年で地学3単位が残るかどうかです。地学の要望であった2単位が3単位になったが、必須2単位が選択3単位になったわけです。

田島 : そういう問題を含めて、どしどし意見を出してほしい。

西村(進)(壱岐高) : 私は最初から入っていないが、この会が歩んできたのを考えさせられる。会員にいろいろの要素がある。先生あり、学生あり、会社関係あり、それにこたえて行かねばならない。事業の中に地質巡検、天体観測や海洋調査があるが、地質巡検に偏っていたのではないだろうか。多くの要望により普及に力が入って、会員の学術的向上がなされたので、会員のレベルアップがなされた段階で今後なすことは何か。関連学会や研究会との関係をどうするか。密接な連絡をとりながらやって行くことはどうか。また事業を行なうのに会費の点があり、今のままでまかなえ

るのかどうか。

堀口(長崎南高) : 西村先生から問題が出されたが、他の皆さんからも問題を出してもらいたい。現在、会員が固定している。もっと新しい会員を獲得する必要はないか。

荒木 : テーマがいくつかでているが、48年度よりの高校地学の問題、会員の構成から考えて、それぞれの要望にこたえるためにはどうするべきか、小・中・高校部会との関係はどうか、活動内容が地質に偏っていたのではないかという問題が提起された。高校地学は別に考えることにして、会の活動として、会員の要望に十分答えることができるようにするために何かありませんか。

西村 : 壱岐の調査に会員の方が参加していると思うが、それぞれの持味を生かして活動をするのはどうか。また他県の地学関係の団体や大学との交流を深めながらやって行ってはどうか。

石川(長崎西高) : 10月20日頃、九大で地質学会があった時、鹿児島大学の早坂さんにこちらの会員になってもらったが、その時の先生との話で、ぜひ鹿児島県の地学会との交流をして巡検会をしてはということだった。友人が静岡地学会に関係しているが、それらと交流をとるとも考えられる。

石井(小松地研) : 「近きより遠きに及ぼす」ですね。本会が地質に偏った傾向は始めからあったし、方針をたてる話し合いのたびに必ず話題になった。しかし、地質以外も少しはやってきた。皆

んなが必要を感じたのは、地学の中で地質にあったようですし、よその所でも同じ傾向である。多くの人の共通点も地質にあったので、要求によりそうなったようである。押しつけがましい意見ですが。

西村：幸い、地元には海洋気象台もあるし、それを利用することを考えてみてもよい。

小田：今後のレベルアップについてですが、このことを中心になるのは日曜地質巡検会と会誌を充実することと思う。これらは普及には効果があった。今後、巡検会を3回に1回は調査形式でやってみてはと思う。

荒木：一つの新しい運営のあり方として、巡検会の持ち方の話がでたわけです。日曜地質巡検会は、原則として第3日曜日にやりましたが、それと並行して調査の会をやって行くのを具体化してよいでしょうか。

小林（佐世保北高）：地質に偏ったという話ですが、天文とか気象のように、自分の専門以外に疑問が沢山あり、だれに話したらよいか困っている。この方面の専門の先生の話でも聞いてみてはどうか。しかし、ウエイトは地質にかけてやって行ってほしい。

石井：海洋気象台には啓蒙の任務があり、一般によびかけて同好会をつくり、1週1回位のパンフレットを出して活潑な活動をしてくれたこともあったようですが、最近はそのようなことはどうでしょうか。

田島：丸山先生、ご存知ですか？

丸山（緑ヶ丘中）：生徒などを連れて行くと、非常に親切にしてくれる。自分達から働きかけたならばよい。

西村：気象協会が普及活動をやっている。

石井：唐八景で、朝から夕刻まで、風速・風向・風力の同時観測を学校の先生と生徒でやったことがある。これは気象台からの呼びかけでやったことで、台長がその結果の分析をし、生徒達に説明してくれた。ちょうど、ハタあげのシーズンでしたが、唐八景に海岸から風が吹き上げていることなどがわかった。

西村：私は、40日許り実習に行ったことがある。
松本（長崎大）：地学のバックが広すぎるために、そのことで地学会など運営が難しくなる。レベルアップになると分化し、幅の広さとせまさとの関係が問題になる。

田島：討論するだけで、今決める必要はないのですね。他の大学や学術団体との交流をして行きたい。

松本：会則の第2条に引っかかるが、調査研究を行なうのに、「長崎県の」とあるのを拡大解釈する必要はある。

藤田（光）（長崎南高）：議決を必要とする問題がある。高校地学の存続に関することです。全国的な組織としては、日本地学教育学会があってこの問題を検討している。

田島：対外的交流に会費は間に合うのか。会員が教師・研究者に定着してしまっているという問題について、会員構成の再検討についてはどうか。

藤田：大学の水産学部には海洋科学や海洋地質をやっている人もいる筈だが、そういう方にメンバーになって頂けばよい。

石井：難しい問題である。海洋学・天文学・気象学の専門家に入ってもらうのはよい。しかし、この会が堅実にやってきたのは、一つの方針にまともだったからだと思う。いろいろの人に入ってもらいと大きくはなるが、まとまりがなくなる。

田島：壱岐の団研で、他の大学の人が長崎県の地学会に200名もいるというので驚いていた。

堀口：やりたい人はやってきた。若い人を入れておかないと、会が老化する。初心者への指導にあたる巡検会があってよい。

田島：長崎の史談会が一般の人の指導をよくやっている。

石井：若い人を増すことと、一般の人の啓蒙は大事である。一つ試してみる必要がある。

田島：現在の会費は年額6000円であるが、未納が多い。NESAそくほうに書いてある。

西村：事業を拡大するには足らんだろう。

小林：納入したかどうか、本人は忘れてしまう。

堀口：3年間滞納すると除名される。払いすぎの人も、荒木先生のような例もある。(笑)

西村：ある年令になったら、終身会費いくらというところで納めたらどうだろう。

田島：それぞれの地域を研究するのに、文献が必要である。会の方で文献の世話をしてもらえるか。

小田：コピーの場合、地学会の費用で用紙を買ってコピーをとって送ればよい。無料でよい。

堀口：事務局にそうした仕事をさせるのは大変だ。

荒木：この辺で総括してみたい。本日提起された問題点は次のようであったと思う。

1. 日曜巡検会とともに、他の分科のものも取上げる。
2. 会員の構成と、他の研究団体や大学との交流。
3. 会費の件。
4. 一般参加をさそう会の開催。
5. 地学文献の活用と事務局の実状。

堀口：「N E S Aそくほう」についての意見はな
いか。原稿を送ってほしい。

荒木・田島：時間がきましたので、これで討論会
を閉じたいと思います。ご協力有難うございました。(拍手)

(要約：鎌田泰彦・西村暉希)